

## 採血合併症（血管迷走神経反応）減少への取り組み

◎有田 翔平<sup>1)</sup>、山口 勝利<sup>1)</sup>、小鷹 多美<sup>1)</sup>、松永 由紀子<sup>1)</sup>、田中 信次<sup>1)</sup>  
日本赤十字社 熊本健康管理センター<sup>1)</sup>

～採血合併症（血管迷走神経反応）減少への取り組み～  
【目的】当センター巡回健診では、年間約4万件の採血を臨床検査技師が行っている。採血合併症とされる痛み、しびれ、内出血などは時折見られるが、当センターで最も多く報告件数が挙げられるのは、血管迷走神経反応(以下VVR)である。VVRは疲労、不眠、ストレスなどの身体的・精神的要因や、人混み、不慣れな空間などの環境的要因から発生する。また、VVRは全年齢層に起こりうるもの、特に採血の経験が少ない若年層に多い傾向がみられる。そこで今回当センター巡回健診におけるVVRについて2024年度より発生率の低下を目指すべく以下の対策を行い若干の知見を得たので報告する。<対策>  
①臥位採血実施場所の確保（簡易ベッド）  
②事前問診と検査施行順番の変更  
③採血困難者への看護職の応援体制  
④採血研修会の開催【方法】2022年度から2024年度までの巡回健診にて採血を行った受診者119,677名（男性74,971名、女性44,706名）を対象としVVR発生率の比較検討を行った。【結果】年度ごとのVVR

発生率は2022年度0.044%、2023年度0.040%、2024年度0.036%であった。その内、30歳未満のVVR発生率は2022年度0.109%、2023年度0.106%、2024年度0.072%と2024年度に大幅低下を認めた。2024年度に新しく取り入れた対策の効果によりVVRの発生率が減少したと思われる。また、VVRを発症した者のうち30歳未満の割合は2022年度66.7%、2023年度56.3%、2024年度57.1%と全体の半数以上を占めていた。【考察】VVRは前述のとおり若年層に多いと言われており、同様の結果となった。今回はVVRの既往がある方、採血が不安な受診者向けの対策を実施し、効果が得られた。今後はさらに、再採血で数回穿刺し、採血に時間がかかるといったVVR発生の可能性が上昇するパターンへの対策を講じるため、引き続き採血時間、回数、環境などを分析する予定である。さらにVVR以外の採血合併症についても詳細に要因を分析し採血技術の向上を図りたい。  
日本赤十字社熊本健康管理センター検査部第二検査課  
連絡先 096-384-3100 内線（8419） 有田 翔平